

## 7266 今仙電機製作所

藤掛 治 (フジカケ オサム)

株式会社今仙電機製作所社長

### 海外受注が好調に推移し増収増益、通期売上 1,100 億円へ

#### ◆タイを中心にアジア、北米で生産増

取締役 大野真澄

平成 26 年 3 月期第 2 四半期は、タイを中心としたアジア圏、北米で生産増となった自動車部品が好調に推移し、売上高 531 億 92 百万円(前年同期比 26.6%増)、営業利益 23 億 78 百万円(同 31.1%増)、経常利益 32 億 88 百万円(同 78.1%増)、四半期純利益 22 億 93 百万円(同 98.0%増)となった。

総資産 825 億 14 百万円(前年同期比 11.7%増)、純資産 400 億 81 百万円(同 11.4%増)は、売上増に伴う売掛債権の増加、国内外の設備投資強化による固定資産の増加などによって増加した。1 株当たり純資産は 2,218.13 円(同 230.94 円増)、自己資本比率は 47.4%(同増減なし)となった。

営業利益の主な増益要因として、海外自動車部品増収による 9 億 27 百万円増、海外自動車部品の原価低減による 3 億 70 百万円増、為替変動の影響による 10 億 16 百万円増が挙げられる。主な減益要因は、構成の変化・売価値下げによる 5 億 19 百万円減、償却費・金型リース負担増による 5 億 5 百万円減、販売管理費の増加による 6 億 64 百万円減である。

経常利益の主な変動要因は、営業利益の変動による 5 億 64 百万円増、為替差益の増加による 9 億 26 百万円増となっている。四半期純利益の主な変動要因は、経常利益の変動による 14 億 42 百万円増、法人税等の増加による 2 億 3 百万円減である。

#### ◆セグメントの状況

事業の種類別セグメントとして、全体の 96.0%を占める自動車部品関連事業は、外部売上高 510 億 54 百万円(前年同期比 112 億 2 百万円増)、営業利益 23 億 77 百万円(同 4 億 72 百万円増)と増収増益になった。主力のシートアジャスタの受注が、タイを中心としたアジアにおいて増加した。

得意先系列別売上高構成として、ホンダ系列向け 210 億 58 百万円(前年同期比 15.4%増)は、北米、タイにおいて受注を回復した。日産系列向け 107 億 29 百万円(同 46.8%増)は、北米における新規受注がフルに寄与している。三菱系列向け 65 億 83 百万円(同 20.7 %増)、富士重工業向け 37 億 65 百万円(同 85.8 %増)は、国内における受注が増加した。

機種別売上高構成として、機構部品 444 億 63 百万円(前年同期比 29.3 %増)のうち、シートアジャスタ 444 億 30 百万円(同 29.4 %増)の受注増が自動車部品関連事業全体の売上増加につながっている。電装部品は 48 億 9 百万円(前年同期比 27.8 %増)、その他は 17 億 81 百万円(同 4.6 %増)であった。

その他の事業では、ワイヤーハーネス関連事業が、外部売上高 12 億 43 百万円(前年同期比 40 百万円増)、営業利益マイナス 6 百万円(前年同期はマイナス 1 億 16 百万円)とイプシロン関連の受注で若干の増収となり、赤字幅を縮小した。

福祉機器関連事業は、外部売上高 5 億 13 百万円(前年同期比 26 百万円減)、営業利益 3 百万円(同 28 百万

円減)と自動車いすの売上が減少し、減収減益となった。

自動車販売関連事業は、外部売上高 3 億 80 百万円(前年同期比 35 百万円減)、営業利益マイナス 1 百万円(前年同期はマイナス 12 百万円)と、新車販売の低迷が続いている。自動車販売関連事業については、子会社の名北三菱自動車販売が行う三菱自動車のディーラー事業を会社分割により譲渡し、同事業より撤退することを決議した。

所在地別の状況として、国内は、外部売上高 227 億 83 百万円(前年同期比 7 億 45 百万円増)、営業利益 11 億 43 百万円(同 28 百万円増)と、自動車市場の回復により増収増益となった。アジアは、外部売上高 166 億 21 百万円(同 40 億 86 百万円増)、営業利益 17 億 15 百万円(同 6 億 50 百万円増)と、中国問題の回復に加え、タイなどにおける受注増加により増収増益であった。北米は、外部売上高 137 億 87 百万円(同 63 億 48 百万円増)、営業利益マイナス 4 億 19 百万円(同 1 億 89 百万円減)と、日産系列向け新規受注のフル寄与に加え、ホンダ系列向けの受注回復により増収となったが、利益面では減益となった。所在地別外部売上高構成は、国内 42.8%、アジア 31.3%、北米 25.9%となっている。

海外売上高は 312 億 29 百万円(前年同期比 105 億 77 百万円増)に伸び、内訳として北米 138 億 80 百万円(同 64 億 9 百万円増)、アジア 156 億 79 百万円(同 37 億 33 百万円増)、その他 16 億 69 百万円(同 4 億 34 百万円増)となった。海外売上高比率は 58.7%(前年同期は 49.2%)に上昇している。

設備投資 32 億 66 百万円(前年同期比 2 億 83 百万円減)では、国内外の新規製品対応、生産性・品質の向上への対応に加え、メキシコ新工場立ち上げに伴う投資を行っている。減価償却費 25 億 42 百万円(同 5 億 44 百万円増)は、北米、中国拠点の設備投資の増加に伴い海外で増加している。

キャッシュフローの状況として、営業活動によるキャッシュフローは 29 億 73 百万円増加し、投資活動によるキャッシュフローが有形固定資産の取得等の投資活動によって 23 億 88 百万円支出となった結果、フリーキャッシュフローは 5 億 85 百万円となった。財務活動によるキャッシュフローは、借入金の返済などにより 67 百万円減少した。

## ◆アジアが大幅な増収増益の通期見通し

平成 26 年 3 月期通期業績見通しについては、当初予想を据え置き、売上高 1,100 億円(前期比 27.7 %増)、営業利益 55 億円(同 95.7 %増)、経常利益 59 億円(同 63.5 %増)、当期純利益 40 億円(同 127.1 %増)を計画しているが、内容については、最新の見通しに基づいて変更した。

通期予想における営業利益の主な変動要因については、まず増益要因として、国内自動車部品の売上増による 7 億円増、国内自動車部品の原価低減による 6 億 50 百万円増、海外自動車部品の増収による 18 億 50 百万円増、海外自動車部品の原価低減による 8 億円増、為替変動の影響による 19 億円増が見込まれている。減益要因としては、構成の変化・売値下げによる 8 億 40 百万円減、償却費・金型リース負担増による 10 億 50 百万円減、販売管理費の増加による 9 億 50 百万円減、経費等の圧縮の緩和による 4 億 80 百万円減が予想される。

事業の種類別セグメントにおける通期見通しでは、自動車部品関連事業は外部売上高 1,058 億 50 百万円(前期比 242 億 64 百万円増)、営業利益 54 億 70 百万円(同 26 億 42 百万円増)と、北米における受注の増加、中国市場の回復などによる増収増益を予想している。

得意先系列別では、ホンダ系列向け 414 億 40 百万円(前期比 21.8 %増)、日産系列向け 218 億円(同 35.6 %増)、三菱系列向け 145 億 40 百万円(同 32.8 %増)、富士重工業向け 67 億 10 百万円(同 28.2 %増)を計画している。

機種別では、機構部品 919 億円(前期比 29.7 %増)のうち、シートアジャスタ 918 億 50 百万円(同 29.8 %増)が引き続き堅調に増加する見込みである。電装部品 102 億 70 百万円(同 30.3 %増)、その他 36 億 80 百万円(同 29.3 %増)も伸長が予想されている。

その他の事業では、ワイヤーハーネス関連事業で航空機、工作機械ともに増収が見込まれ、採算改善に取り

組むことによって、外部売上高 27 億 10 百万円(前期比 1 億 82 百万円増)、営業利益 50 百万円(同 1 億 34 百万円増)と黒字回復を予想している。

所在地別の状況として、外部売上高は国内 475 億 60 百万円(前期比 37 億 80 百万円増)、アジア 348 億 10 百万円(同 99 億 14 百万円増)、北米 276 億 30 百万円(同 101 億 84 百万円増)と全体的に伸長する見通しである。営業利益は国内 14 億 90 百万円(前期比 1 億 2 百万円減)、アジア 43 億 10 百万円(同 22 億 93 百万円増)、北米 30 百万円(同 6 億 59 百万円増)と、アジアが利益貢献の柱となる見通しである。

海外売上高は 605 億円(前期比 163 億 1 百万円増)、内訳として北米 295 億円(同 118 億 69 百万円増)、アジア 280 億円(同 38 億 36 百万円増)、その他 30 億円(同 5 億 96 百万円増)が見込まれており海外売上高は 55.0%(前期は 51.3%)まで上昇することを予想している。

設備投資は 86 億円(前期比 8 億 91 百万円増)、減価償却費は 53 億 10 百万円(同 9 億 57 百万円増)を計画している。

## ◆長期ビジョン Dream2020 の取り組み

社長 藤掛 治

2013 年度は、2020 年度連結売上高 1,800 億円、シートアジャスタ世界トップを実現するために、改めて将来への投資を進める 1 年と位置づけて展開している。国内、北米、アジアと総じて需要は堅調に推移する見通しであるが、不安定要素を注視していく必要があると考えている。

カーメーカーの方針として、「共通化」、「まとめ発注」により車種・地域・時間をまたいだ発注が推進されている。そこで当社では、製品の集約化・共通化、グローバル最適生産体制構築、受注・製品仕様・リスク分散等の先行検討を推進していく。

グローバルでの事業拡大については、需要の期待できる地域には積極的に先行進出し、あらゆる海外調達、現地生産を促進していく。また、シートアジャスタ以外の海外生産についても取り組んでいく。タイでは、スズキ向けのランプを今期より生産している。昨年設立したメキシコ現地法人は、2014 年 1 月操業開始に向けて順調に準備を進めている。

非自動車領域の事業開発では、既存の非自動車領域(航空機・福祉機器)を強化し、子会社であるシーマイクロや既存自動車部品リソースを活用しながら新規事業を確立していく。

開発事例として、車いすの移乗用リフトは臨床試験、モニター評価後、来春の量産化を目指している。また、東洋航空電子が「アジア No.1 航空宇宙産業クラスター形成特区」の認定を受け、今後の展開が期待される。

配当については、1 株当たり年間 26 円(前期は 20 円)を予定している。

(平成 25 年 11 月 21 日・東京)